

リア紀行』がそれぞれ別の版元から岩崎真澄と吹田順助の訳で出た。

さて履歴書によると、高木は大正5年10月東京高等師範学校教授を辞めた後、約6年間の浪人時代を経て、一時松山高等学校の独語科講師を務めたが、大正11年(1922)3月10日付で新設の大阪外国語学校の教授に任命された。校長の中目覚なかのめあきらが彼のドイツ語の実力を見込んで招いたのである。中目は東大独文科の一級上の先輩であり、卒業後ウィーン大学で地理学を学び、地理学者になった人。高木は彼の好意に深く感謝した。

『大阪外国語学校一覧』(自大正十一年至大正十二年)を見ると、高木は独語科主任教授のほか、評議員や教務課長なども務めている。(英語科には以前五高教授だった佐久間信恭がいた。)そして、遅蒔きながらもその年の6月、文部省より独逸語及び語学教授法の研究のため満一年間のドイツ留学を命ぜられた。だが、出発直前の12月18日、腸チブスのために急逝した。享年47。彼の死は我が国の神話学や民俗学のみならず、ドイツ語界にとっても大きな損失であった。

ベルリン東洋語学校教師 菅野養助

明治時代において高等学校の語学教師が官費で留学することは難しく、時期的にも他の分野に比べてかなり遅れた。五高の英語教師夏目漱石と一高の独語教師藤代禎輔が文部省から派遣されてそれぞれ英国と独逸に留学したのが、その最初の例だが、それは漸く1900年(明治33)になって実現した。さて、第七高等学校造士館の初代独語教授であった菅野かんの養助(1874-1918)は留学を強く希望していた。菅野には、独語科主任でもあり年齢からも当然自分が文部省留学生に選ばれるとの期待があった。だがそこへ、1907年(明治40)5月東京外国語学校教授の武内大造が独語教授として赴任して来た。武内は、外語では同僚の田代光雄が留学に出発したばかりで、自分に次の順番が廻ってくるのは遅いので七高を利用したのである。七高赴任に際し留学に関して何らかの約束があったと見てよからう。そうでなければ東京外語教授の地位にある者が、何のゆかりもない鹿児島に赴任することは普通考えられないからだ。いずれにしろそのために菅野はオミットされ、彼の不平と憤懣を買った。このことは二人の同僚であった小池秋草(堅治)が『七高思出集前編』において証言している。武内は留学を終えると東京外語へ戻った。そこで菅野は2年間七高教授を休職し、1908年(明治41)7月自費で渡独した。ベルリンのシャルロテンブルクのウーラント街187番地に下宿した。そして、ベルリン大学付属東洋語学校(Seminar für Orientalische Sprachen)の日本語講師になった。東洋語学校の日本語科にはR・ランゲ教授を中心に、歴代の日本人講師には井上哲次郎、千賀鶴太郎、巖谷小波、辻高衡、市川代治らがいた。菅野は友人の市川に頼んでその後任になったのである。ベルリンのダーレムにあるプロイセン国立公文書館には東洋語学校関連史料が保存されているが、その中に菅野自筆の履歴書や岩崎行親七高校長の推薦状(ともに独文)なども見られる。前者にはこう書かれている。

履歴書

私儀、菅野養助は明治7年（1870）3月9日、登米（仙台近くの小都市）に生まれた。明治29年（1896）仙台の第二高等中学校の卒業試験に合格後、東京大学に入学、主として独語・独文学を学びました。3年間の勉強によって日本の女流歌人と女流作家に関する論文を書き、文学士の称号を取得した。同年9月山口高等学校の独語教授に任命され、2年間勤めました。明治34年（1901）9月、鹿児島の第七高等学校の独語科主任教授に転任となり、学校図書館の設立と運営を委任された。

東大でドイツ文学専攻の者が日本の女流歌人や女流作家について卒論を書くとはちょっと不思議に思うかも知れないが、これは主任教授のカール・フローレンツが日本学者であり、卒論には日本文学に関して独文で書くことを要請したからであった。

一方、岩崎校長の推薦状（1908年7月10日付）には、菅野の略歴を記し、七高造士館での独語教授としての功績を称賛したのち、こう結んでいる。「氏はドイツ語とドイツ文学のさらなる研究のために、私に賜暇を願い出、独逸に向けて出発しようとしています。これを以て署名者は氏の特別な親密さと満足を証明します」。これによって菅野の目的は、ベルリン東洋語学校の教師をしながら独語・独文学を研究することだったことが分かる。これは菅野だけでなく当時普通に見られたことである。彼の後任の木村謹治を初め、成瀬清（無極）、辻善定もそうであった。さて菅野は東洋語学校校長で枢密顧問官のエドゥアルト・ザッハウに宛てた手紙（1908年9月9日付）では「近い将来貴殿の好意ある御指導のもとに、東洋語学校で誠実に私の義務を果たせることを大変喜んでおります。」と述べている。契約期間は1908年9月から1910年7月までの2年間4学期であった。

『ベルリン大学職員・学生録』（略称Personal-Verzeichnis d. Univ. Berlin）によって1909年夏学期の日本語科の講義題目を見てみると、全部で10の講義が開かれているが、内訳はランゲ4、辻高衡3、H・プラウト2、菅野1となっている。菅野が担当したのは「日本語実用演習」（Praktische Übungen im Japanischen）で、土日を除く毎日夕方5時から7時までであり、5時から6時まで初級コース、6時から7時まで第2（中級）コースに分かれていた。ちなみに、辻高衡は巖谷小波の後任として1902年（明治35）夏学期以来、東洋語学校の講師を勤めた人で、日独戦争（第一次大戦）の時も解雇されなかったほどランゲ教授とザッハウ校長の信任が厚かった。

菅野がベルリンで知り合った友人に、来日してプラーゲ旋風を起こした著作権主唱者ハインリヒ・プラーゲがいた（『記念誌 第七高等学校造士館』）。

履歴書（文部省所蔵）によると、菅野は1910年（明治43）8月帰国し、再び七高教授に復帰した。小池秋草の語るところによれば、菅野は「哲学や美学の本を読むのが好きだったが、常に境遇に対する不満があった。文部省の命を待ちきれず自費洋行して、彼地で具に辛酸をなめた。（中略）後に大学入を企てて東北大学の図書館に足掛かりを得たが、司書官の職制が出来ないので、煩悶中病魔に犯され死んだ」（『七高思出集前編』）という。だが履歴書では大正4年8月9日付で、七高教授から東北帝国大学医学専門部教授に転任になっている。そして学生監事務取扱を命じられたが、1917年（大正6）2月19日に死去したと書かれている。小池には少

し記憶違いがあるようだ。それはともかく、病魔に犯されたことに加え、高等学校の語学教師の地位に満足出来なかったことに彼の大きな不幸があった。

熊本薬専教授 上田茂次郎



上田茂次郎

上田茂次郎（うえだ・もじろう）は、熊本大学薬学部保存されている履歴書によると、1870年（明治3）3月18日、熊本市坪井に生まれた。父上田新平は旧細川藩士。最初熊本県八代郡植柳小学校に学び、明治14年3月同校下等科を卒業すると、直ちに熊本市坪井町の壺川小学校に転校、3年間高等科修業。同17年4月同校高等科を卒業後、済々黉に入学、皇漢学、数学を2年間修めた。その頃同黉に普通科が設置されたので更にそこで2年間修業したが、その際ドイツ語も学んだのではないかと思う。やはり当時そこでドイツ語学んだ人に後年の外交官上田仙太郎、新聞人鳥居素川などがいた。明治22年上京、独逸学協会学校に入学、3年間高等中学程度の普通学を修めた。注目されるのは、そこを了えると同校内の専修科に進み3年間学んでいることだ。『独逸学協会学校五十年史』（昭和8年）に「専

修科は専ら法律経済の学を授くる所であったが、是亦独乙人の教官之を担当し、独語を以て講義した。（中略）当時の機運が大に独乙の制度を収容せんとする時代であったから、先づ独乙の行政機構立法制度などを熟知する人物を養成せんとする目的に出でたるもので、行政官や司法官の試補を造るの心組であったのである。然して此当時は帝国大学にも、まだ独法科の設置なき時代で、寧ろ我校の施設で刺激せられ、後には独法科の設置を見るに至ったものである」とある。明治21年に第一回卒業生を出し、上田茂次郎もその一人であった第八回生は、すなわち明治28年の卒業で、前後10年間に総数165人の卒業生を世に送った。彼らの中には枢密顧問官有松英義、司法大臣の小山松吉、鴻池銀行頭取の加藤晴比古など多くの著名人がおり、上田のように独語教師となった人に武内大造（東京外語）、中村健一郎（三高）、足立謙吉（六高）などがいた。

専修科卒業後、帰熊し私立の熊本医学校と熊本薬学校の独語の嘱託教師となった。だがそれは2年で辞め、五高記念館所蔵の履歴書によると、その後九州鉄道株式会社に勤め、次いで明治32年3月には「東京府荏原郡大井村後藤合資会社ニ入社外国品購買係ニ従事」した。だがサラリーマンは性に合わなかったのか、明治33年9月に五高の嘱託教員になった。それを1年で依願退職したのは恐らく月報酬金35円に不満だったからではないか。熊本大学薬学部所蔵の履歴書によると、明治34年9月、上田は北海道の旭川衛戍地連合教育会の将校語学教官として招かれ、再び熊本を離れた。明治37年8月に日露戦争の勃発のため動員令が下され旭川連合教育会は閉会したので、彼は今度は陸軍士官学校の図書係主任を命じられた。そして1905年（明治